児童・生徒のサポートの互惠性と精神的健康¹

——交換志向性の調整効果——

谷口弘一^{2,3} 日本学術振興会（岡山大学） 田中宏二 岡山大学

Relationship between support reciprocity and stress responses among elementary, junior high, and senior high school students: Moderating effects of underbenefitting and overbenefitting exchange orientations

Hirokazu Taniguchi (*Japan Society for the Promotion of Science, Okayama University*)
and **Koji Tanaka** (*Okayama University*)

This study examined moderating effects of underbenefitting and overbenefitting exchange orientations on the relationship between support reciprocity in friendships and mood among elementary, junior high, and senior high school students. The participants were 262 first-year senior high school students, 223 second-year junior high school students, and 248 sixth-year elementary school students. The participants completed questionnaires regarding mutual support in friendships, stress responses, and two types of exchange orientations (underbenefitting and overbenefitting exchange orientation). For senior high school students, an underbenefitting orientation had a moderating effect on the relationships between support reciprocity and depression. Among senior high school students low in underbenefitting orientation, individuals who felt slightly underbenefitted regarding support exchange in friendships reported the lowest degree of depression. In addition, individuals high in underbenefitting orientation tended to express a higher level of depression than those low in underbenefitting orientation when they felt slightly underbenefitted.

Key words: support reciprocity, stress responses, underbenefitting exchange orientation, overbenefitting exchange orientation.

The Japanese Journal of Psychology
2008, Vol. 79, No. 1, pp. 53-59

本研究の目的は、小、中、高校生の友人関係におけるサポートの互惠性と精神的健康との関連に対する交換志向性の調整効果を検討することである。

交換志向性は、直接的な互惠性を志向する個人的傾向である (Milardo & Murstein, 1979)。交換志向性の高い人は、他者に利益を提供したとき、即座に同等な利益を期待したり、すぐに返報できない利益を受けたとき、不快に感じたりする。交換志向性は、互惠性と関係満足感あるいは否定的感情との関連に対して調整効果を持つ (Buunk, Doosje, Jans, & Hopstaken, 1993;

Correspondence concerning this article should be sent to: Hirokazu Taniguchi, Department of Psychology, Doshisha University, Karasuma-Imadegawa, Kamigyo-ku, Kyoto 602-8580, Japan (e-mail: htaniguc@mail.doshisha.ac.jp)

¹ 本研究は文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の援助を受けて行われた。本研究の一部は 2004 年度日本健康心理学会第 17 回大会および 2004 年度中国四国心理学会第 60 回大会で発表された。

² 本研究の実施にあたり、調査にご協力いただいた先生方、ならびに児童、生徒の皆様にも深く感謝いたします。

³ 現所属：同志社大学

Buunk & Van Yperen, 1991)。交換志向性の調整効果とは、交換志向性の低い者よりも高い者において、互惠性がより重要視されるために、結果として、互惠性と関係満足感あるいは否定的感情との関連がより強くなるというものである。Buunk et al. (1993) は、鉄道会社の勤務者を対象にして、交換志向性の高い従業員は、交換志向性の低い従業員と比べて、上司との関係が互惠的でないとき、否定的感情を多く経験することを見いだししている。同様に、Buunk & Van Yperen (1991) は、既婚者を対象にして、交換志向性の高い者においてのみ、配偶者との互惠性と結婚満足感との間に有意な 2 次関係が存在することを明らかにしている。

Sprecher (1992) は、交換志向性には二つのタイプがあることを指摘している。一つは、利得不足志向性 (underbenefitting exchange orientation) であり、もう一つは、利得過剰志向性 (overbenefitting exchange orientation) である。前者は、相手に与えた利益よりも少ない利益を自分が得ているということに対して、どの

程度、関心があるかを表し、後者は、相手に与えた利益よりも多い利益を自分が得ているということに対して、どの程度、関心があるかを表す。二つの志向性は理論的に異なる概念であり、どちらか一方のみが高い人もいれば、両方が高いあるいは低い人も存在する。両志向性の相関は、 $r = -.06$ から $r = .33$ であり (Buunk & Prins, 1998; Sprecher, 1992, 1998), 無相関か弱い正の相関のみであることが確認されている。Buunk & Prins (1998) は、大学生を対象にして、親友との互恵性と孤独感との関係に対する利得不足志向性および利得過剰志向性の調整効果を検討した。彼らは、利得不足志向性の高い人では利得不足状態が孤独感と関連を持ち、利得過剰志向性の高い人では利得過剰状態が孤独感と関連を持つという仮説を立てた。分析の結果、利得過剰志向性の調整効果が認められ、利得過剰志向性の高い者は、低い者よりも利得過剰状態において孤独感が高くなることが明らかとなった。

本研究は、Buunk & Prins (1998) と同様に、利得不足志向性および利得過剰志向性が友人関係におけるサポートの互恵性と精神的健康との関連に対して調整効果を持つかどうかについて、小、中、高校生を対象にして検討を行う。友人とのサポート授受が利得不足状態にあるとき、利得不足志向性の高い者が低い者よりも精神的健康状態が悪化することが示されれば、利得不足志向性の調整効果があると判断する。一方、友人とのサポート授受が利得過剰状態にあるとき、利得過剰志向性の高い者が低い者よりも精神的健康状態が悪化することが確認できれば、利得過剰志向性の調整効果があるとみなす。

サポートの互恵性と精神的健康との関連は個人の発達段階によって異なることから (Taniguchi & Ura, 2002), 本研究では、サポートの互恵性と精神的健康との関連に対する利得不足志向性と利得過剰志向性の調整効果が発達に伴ってどのように変化するかについても併せて検討を行う。

方 法

調査対象者

高校 1 年生 262 名 (男子 129 名, 女子 131 名, 不明 2 名), 中学 2 年生 223 名 (男子 104 名, 女子 119 名), 小学 6 年生 248 名 (男子 124 名, 女子 124 名) が調査に参加した。

調査内容

調査用紙には、フェイスシートに記載された回答者の個人的属性を質問する項目の他に、以下に挙げる尺度が含まれていた。

友人からのサポート受領尺度 岡安・嶋田・坂野 (1993) が作成した 16 項目からなる中学生用 SESS 尺

度 (the Scale of Expectancy for Social Support for Junior High School Students) の中から、因子負荷量を考慮して、道具的サポート 3 項目、情緒的サポート 3 項目を採用し、合計 6 項目からなるサポート受領尺度を作成した。中学生用尺度を用いた理由は、小、中、高校生の三つのサンプルの結果を比較する際に、尺度に含まれる項目の内容や表現が同一である方が望ましいと判断したためである。調査対象者は、最も親しい友人を一人選択し、その友人から最近 1 カ月の間にどの程度のサポートを受け取ったかについて 4 件法で回答した。各項目の得点を合計して、サポート受領得点を算出した。 α 係数は、小学生が .85, 中学生が .89, 高校生が .88 であった。

友人へのサポート提供尺度 サポート受領尺度の 6 項目について、それぞれの項目が友人に対するサポート提供を表すように表現を変更したものをサポート提供尺度として用いた。調査対象者は、サポート受領尺度を回答する際に選択した友人に対して、最近 1 カ月の間にどの程度のサポートを提供したかについて 4 件法で回答した。各項目の得点を合計して、サポート提供得点を算出した。 α 係数は、小学生が .82, 中学生が .89, 高校生が .89 であった。

ストレス反応尺度 三浦・福田・坂野 (1995) によって作成された中学生用ストレス反応尺度の中から、因子負荷量を考慮して、四つの下位尺度 (不機嫌および怒り、抑うつおよび不安、無気力、身体的反応) から各 5 項目ずつ計 20 項目を選択して用いた⁴。小、中、高校生の三つのサンプルの結果を比較するために、サポート尺度と同様に、ストレス反応尺度も中学生用を用いた。調査対象者は、各項目によって示されている気持ちや体の調子が、最近の自分にどの程度当てはまるかに基づいて、4 件法で評定を行った。下位尺度ごとに各項目の得点を合計してストレス反応得点を算出した。得点が高いほどストレス反応の程度が高いことを示す。 α 係数は、小、中、高校生順に、不機嫌および怒りが .88, .89, .89, 抑うつおよび不安が .88, .89, .89, 無気力が .84, .78, .79, 身体的反応が .81, .82, .79 であった。

利得不足志向性尺度および利得過剰志向性尺度 Sprecher (1992) の尺度をもとに、谷口・田中 (2005) が作成した 13 項目からなる日本語版の利得不足志向性尺度と利得過剰志向性尺度を用いた。調査対象者は、最も親しい友人との関係を考えたとき、各項目がどの程度当てはまるかについて 4 件法で評定を行った。それぞれ 13 項目の合計得点を利得不足志向性

⁴ Buunk et al. (1993) は、サポートの互恵性がネガティブ感情と関連を持ち、両者の関連が仕事上のストレッサーとは無関係であることを確認している。このことから、サポートが互恵的でない状態、すなわち、利得過剰や利得不足の状態をストレッサーとして想定することが可能である。

得点および利得過剰志向性得点とした。利得不足志向性尺度の α 係数は、小学生が.82, 中学生が.87, 高校生が.83であった。利得過剰志向性尺度の α 係数は、小学生が.83, 中学生が.86, 高校生が.82であった。

結 果

サポートの互恵性とストレス反応との関連

サポートの互恵性とストレス反応との関連を検討するために、互恵性の程度を変動因として傾向分析を行った。まず、サポート受領得点からサポート提供得点を引いて互恵性得点を求めた。この得点が0である場合は互恵的な関係、正の値の場合は利得過剰、負の値の場合は利得不足であることをそれぞれ表している。次に、この互恵性得点に基づいて、調査対象者を、極端な利得過剰 ($3 \leq$ 互恵性得点), 若干利得過剰 ($1 \leq$ 互恵性得点 ≤ 2), 互恵的關係 (互恵性得点 = 0), 若干利得不足 ($-2 \leq$ 互恵性得点 ≤ -1), 極端な利得不足 (互恵性得点 ≤ -3) の5群に分類した。以上のような手続きを経た後、互恵性得点を独立変数、ストレス反応の四つの下位尺度 (不機嫌および怒り、抑うつおよび不安、無気力、身体的反応) を従属変数として傾向分析を行った。結果を Table 1 に示す。

高校生では、四つの下位尺度のうち、互恵性と無気力において、有意な2次傾向が認められた ($F(1, 248) = 5.26, p < .05$)。両者の関係は、互恵群のストレス反応が最も低く、極端な利得不足群および極端な利得過剰群のストレス反応が最も高くなるようなU字型の2次関係であり、サポートが互恵的であるほど、無気力の程度が低下していた。また、抑うつおよび不安においても、2次関係の有意傾向が認められた ($F(1, 249) = 3.09, p < .10$)。ただし、抑うつおよび不安の得点が最も低いのは、互恵群ではなく、若干利得不足群であった。

中学生では、互恵性と不機嫌および怒りおよび無気力において、2次関係の有意傾向が認められた ($F(1, 206) = 3.10, p < .10$; $F(1, 205) = 3.73, p < .10$)。ただし、両関係とも、互恵群のストレス反応が最も低く、極端な利得不足群および極端な利得過剰群のストレス反応が最も高くなるようなU字型の2次関係ではなかった。

小学生では、互恵性と抑うつ、不安および無気力において、有意な2次傾向が認められた ($F(1, 229) = 7.56, p < .01$; $F(1, 226) = 5.47, p < .05$)。また、身体的反応においても、2次関係の有意傾向が認められた ($F(1, 229) = 3.53, p < .10$)。ただし、いずれの関係においても、ストレス反応が最も低いのは、互恵群ではなく、若干利得過剰群であった。

利得不足志向性の調整効果

利得不足志向性がサポートの互恵性とストレス反応との関連に対して調整効果を持つかどうかを検討するために、互恵性と利得不足志向性を独立変数、ストレス反応の四つの下位尺度を従属変数として2要因分散分析を行った。

高校生では、抑うつおよび不安において、互恵性と利得不足志向性の交互作用が有意傾向を示した ($F(4, 230) = 2.25, p < .10$)。下位検定の結果、Figure 1 に示されているとおり、利得不足志向性が低い者は、若干利得不足状態のときに、抑うつおよび不安が最も低下していた ($F(4, 230) = 2.86, p < .01$)。また、若干利得不足状態では、利得不足志向性が低い者よりも、高い者の方が、抑うつおよび不安が高い傾向にあった ($F(1, 230) = 3.68, p < .10$)。

中学生では、不機嫌および怒り、抑うつおよび不安、無気力、身体的反応において、互恵性の有意な主効果が認められた ($F(4, 187) = 3.35, p < .05$; $F(4, 185) = 2.56, p < .05$; $F(4, 187) = 4.70, p < .01$; $F(4, 187) = 4.68, p < .01$)。また、無気力において、利得不足志向性の主効果に有意傾向が認められた ($F(1, 187) = 3.53, p < .10$)。

小学生では、抑うつおよび不安と無気力において、互恵性の有意な主効果が認められた ($F(4, 200) = 2.73, p < .05$; $F(4, 199) = 3.93, p < .01$)。また、不機嫌および怒りと抑うつおよび不安において、利得不足志向性の有意な主効果が認められた ($F(1, 197) = 7.57, p < .01$; $F(1, 200) = 5.76, p < .05$)。

Figure 1. Reciprocity in the relationship with the best friend as related to depression-anxiety for senior high school students low and high in underbenefitting exchange orientation.

Table 1
Relationship between reciprocity/nonreciprocity and stress responses

Reciprocity/ Nonreciprocity	<i>n</i>	Irritation- Anger	<i>n</i>	Depression- Anxiety	<i>n</i>	Helplessness	<i>n</i>	Physical symptoms
Senior high school students								
GUB	9	12.42	19	12.37	19	17.95	19	10.63
SUB	46	10.04	46	9.37	46	13.22	46	9.93
RET	62	10.40	62	10.10	62	12.81	62	10.11
SOB	79	10.46	79	9.80	78	12.85	79	9.41
GOB	48	9.54	48	10.27	48	13.60	47	9.42
Source	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values
Between	4	1.71	4	1.75	4	1.51	4	0.80
Linear trend	1	2.85 ⁺	1	0.50	1	0.63	1	2.37
Quadratic trend	1	0.22	1	3.09 ⁺	1	5.26 *	1	0.03
Cubic trend	1	3.50 ⁺	1	1.51	1	0.09	1	0.01
Within	249		249		248		248	
Junior high school students								
GUB	24	13.54	23	11.65	24	14.33	24	12.25
SUB	42	10.31	42	9.05	42	11.14	42	8.74
RET	61	9.64	60	8.22	61	11.00	61	9.07
SOB	47	10.96	47	9.72	46	11.57	47	10.53
GOB	37	9.24	37	7.89	37	10.57	37	8.38
Source	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values
Between	4	4.39	4	3.69	4	4.15	4	5.30
Linear trend	1	6.85 **	1	5.11 *	1	7.12 **	1	3.85 ⁺
Quadratic trend	1	3.10 ⁺	1	1.98	1	3.73 ⁺	1	1.74
Cubic trend	1	6.85 **	1	6.13 *	1	5.75 *	1	15.39 **
Within	206		204		205		206	
Elementary school students								
GUB	29	10.24	29	9.45	29	8.86	29	8.48
SUB	46	9.59	48	7.92	47	9.06	47	7.51
RET	69	8.94	71	7.45	69	8.91	71	7.68
SOB	58	9.50	58	7.07	58	8.45	58	7.45
GOB	28	10.00	28	8.64	28	11.61	29	8.69
Source	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values	<i>df</i>	<i>F</i> Values
Between	4	0.57	4	2.63	4	3.69	4	1.13
Linear trend	1	0.06	1	2.13	1	3.01 ⁺	1	0.01
Quadratic trend	1	1.97	1	7.56 **	1	5.47 *	1	3.53 ⁺
Cubic trend	1	0.00	1	0.31	1	5.38 *	1	0.08
Within	225		229		226		229	

Note: GUB=Greatly underbenefited, SUB=Slightly underbenefited, RET=Reciprocally treated, SOB=Slightly overbenefited, GOB=Greatly overbenefited.

⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

中学生と小学生では、互恵性と利得不足志向性の主効果は認められたが、利得不足志向性の調整効果を示す交互作用は認められなかった。

利得過剰志向性の調整効果

利得過剰志向性がサポートの互恵性とストレス反応との関連に対して調整効果を持つかどうかを検討するために、互恵性と利得過剰志向性を独立変数、ストレ

ス反応の四つの下位尺度を従属変数として2要因分散分析を行った。高校生では、不機嫌および怒りと抑うつおよび不安において、互恵性の主効果に有意傾向が認められた ($F(4, 231) = 2.29, p < .10$; $F(4, 233) = 2.17, p < .10$)。また、無気力において、利得過剰志向性の主効果に有意傾向が認められた ($F(1, 232) = 3.70, p < .10$)。中学生では、不機嫌および怒り、抑うつおよび不安、無気力、身体的反応において、互恵性の有意な主効果が認められた ($F(4, 185) = 3.98, p < .01$; $F(4, 183) = 2.49, p < .05$; $F(4, 184) = 2.62, p < .05$; $F(4, 185) = 5.01, p < .01$)。小学生では、抑うつおよび不安と無気力において、互恵性の有意な主効果が認められた ($F(4, 202) = 2.61, p < .05$; $F(4, 201) = 2.83, p < .05$)。また、無気力において、利得過剰志向性の有意な主効果が認められた ($F(1, 201) = 4.94, p < .05$)。高校生、中学生、小学生のいずれにおいても、互恵性と利得過剰志向性の主効果は認められたが、利得過剰志向性の調整効果を示す交互作用は認められなかった。

考 察

サポートの互恵性とストレス反応との関連については、高校生のサポートの互恵性と無気力との関係において、衡平理論 (Adams, 1965) から予測される互惠群を頂点としたU字型の2次関係が認められた。こうした結果は、大学生や老婦人の友人関係 (Buunk & Prins, 1998; Rook, 1987)、職場の同僚との関係 (Buunk et al., 1993)、夫婦関係や恋愛関係 (Buunk & Van Ypern, 1991; Gleason, Iida, Bolger, & Shrout, 2003; Van Yperen & Buunk, 1991) を対象とした研究結果と一致するものであり、親密な関係におけるサポートの互恵性と精神的健康との関連に衡平理論が適用可能であることを示唆するものである。四つのストレス反応のうち、無気力においてのみ、サポートの互恵性の効果が確認された理由としては、岡安他 (1993) にも見られるように、サポートの効果が四つのストレス反応のうち、無気力においてより顕著に現れやすいということが影響していると考えられる。発達的な特徴として、本研究では、Taniguchi & Ura (2002) と同様に、高校生においてのみサポートの互恵性と無気力との間に顕著なU字型の2次関係が認められた。本研究の結果によって、サポートの互恵性と精神的健康との関連が個人の特定の発達段階 (個人内発達) により異なることが再確認された。

ストレス反応の種類によっては、サポートの互恵性との間に1次関係や3次関係が認められたものもあった。高校生では、不機嫌および怒りにおいて、1次および3次関係の有意な傾向性があった。これは、極端な利得不足群の不機嫌および怒りが、他の4群と比較してかなり高いことから生じている。Walster, Walster,

& Berscheid (1978) によると、様々な感情の中でも、特に憤慨感や怒りは、利得不足状態の人に特徴的な感情であることが指摘されている。中学生では、不機嫌および怒り、抑うつおよび不安、無気力において、1次および3次関係が有意であった。また、身体的反応においても、3次関係が有意であり、1次関係の有意な傾向性もあった。これは、極端な利得不足群から若干利得過剰群の4群までは2次関係となっているにも関わらず、極端な利得過剰群でストレス反応が上昇せずに低下することによって生じている。衡平理論 (Walster et al., 1978) では、二者の関係が衡平であるほど苦悩が低い (命題 III) ことに加えて、人は自己の利益を最大にしようとする (命題 I) ことも提起されている。中学生の時期では、相手との関係が互恵的であるということよりも、自分が相手よりも得をしているということが重要であるのかもしれない。この点に関しては、今後さらに検討をする必要がある。小学生では、無気力において、1次関係の有意な傾向性ととともに、3次関係が有意であった。これは、極端な利得過剰群の無気力が、他の4群と比較してかなり高いためである。サポート受領とストレス反応との関係には、しばしば負の相関が認められるように (Barrera, 1986)、小学生では、友人からサポートを受け取りすぎることが、自尊心を低下させ、結果として、無気力反応を増加させていると考えられる。

利得過剰志向性および利得不足志向性の調整効果については、高校生において、利得不足志向性がサポートの互恵性と抑うつおよび不安との関連を調整していた。すなわち、利得不足志向性が低い者は、若干利得不足状態のときに、抑うつおよび不安が最も低下していた。また、若干利得不足状態では、利得不足志向性が低い者よりも、高い者の方が、抑うつおよび不安が高いことが明らかとなった。Buunk & Prins (1998) の研究では、利得不足志向性の高い者ほど、利得不足状態において孤独感が高まるという調整効果が予測されたが、この仮説は支持されなかった。その理由として、大多数の者は親密な関係において利得不足状態におかれた場合には関係満足感が低下するために、利得不足志向性による個人差が顕著な形で現れないという指摘がなされている。本研究では、Buunk & Prins (1998) とは異なり、利得不足志向性が若干利得不足状態にあるときの抑うつおよび不安を調整していた。こうした結果の相異は、互恵状態の分類方法によるものと考えられる。すなわち、Buunk & Prins (1998) では調査対象者が3群 (利得不足, 互惠, 利得過剰) に分類されていたが、本研究では5群 (極端な利得不足, 若干利得不足, 互惠, 若干利得過剰, 極端な利得過剰) に分類されていた。このように利得不足状態をより細分化したことによって、利得不足志向性の調整効果が抽出できたのであろう。利得不足志向性におけ

る個人差は、極端な利得不足状態ではなく、若干利得不足状態においてより顕著な差となって現れやすいといえる。その他の理由としては、ストレス反応と孤独感という従属変数の違いも考えられる。例えば、福岡・橋本 (1992) は、大学生を対象として、両親やきょうだいのサポートは抑うつを、友人のサポートは孤独感をそれぞれ低下させる効果を持つことを見いだしている。このように、従属変数によってサポートの効果が異なることが、Buunk & Prins (1998) と本研究における結果の相異を生じさせている可能性がある。

利得不足志向性の調整効果が、小、中学生ではなく高校生においてのみ認められたことに関しては、利得不足志向性そのものの発達的変化が要因の一つとして挙げられる。小、中、高校生を対象に利得不足志向性の発達的変化を検討した谷口・田中 (2005) は、年齢が上がるにつれて、利得不足志向性が高まる傾向にあることを見いだしている。小、中学生と比べて、高校生の方が、利得不足状態に対してより敏感であるために、利得不足志向性による個人差が顕著に現れやすいと考えられる。この他の要因として、発達とともに、友人関係のつきあい方が、数人のグループでの気軽な友だちづきあいから一人の友だちとの深いつきあいへと変化すること (國枝・古橋, 2006; 落合・佐藤, 1996; 菅原, 1985) が挙げられる。世界に対する衡平性 (Austin & Walster, 1974, 1975) の考えに従うと、複数の友人関係を持っている場合は、特定の友人関係における互惠性に加えて、当該の人が営む友人関係全体での互惠性に関する配慮も存在すると考えられる。例えば、特定の友だちとの関係では利得不足を感じたとしても、他の友だちとの関係を自分にとって利得過剰状態にすることによって、全体的な帳尻を合わせようとするかもしれない。複数のグループの友人とつきあうことが多い小、中学生では (國枝・古橋, 2006; 落合・佐藤, 1996; 菅原, 1985)、ある特定の友人との利得不足状態をその他の友人との利得過剰状態で補償することが可能であるが、一人の友人と深くつきあうことが多い高校生では (落合・佐藤, 1996; 菅原, 1985)、そうした補償行動が生じにくいいため、利得不足状態によって引き起こされるストレス反応において利得不足志向性の個人差がより顕在化するのであろう。

本研究では、利得過剰志向性の調整効果は、小、中、高校生のいずれにおいても認められなかった。一方、大学生の友人関係を対象にした Buunk & Prins (1998) では、利得過剰状態において、利得過剰志向性の高い者ほど孤独感が高まるという調整効果が見いだされている。利得過剰志向性の発達的変化に関しては、小、中、高校生を通じて若干の低下が認められているが (谷口・田中, 2005)、大学生以降にどのような変化を示すかについては未だ明らかになっていな

い。青年期以降における利得過剰志向性の発達的変化を詳細に検討した上で、本研究と Buunk & Prins (1998) の結果の相異を慎重に考察する必要がある。

利得過剰志向性および利得不足志向性の主効果に関しては、小学生の無気力を除いて、両志向性が高いほどストレス反応が高いことが明らかとなった。交換志向性の高い人は、交換過程の一時的な不均衡に対する寛容さが低いために (Murstein, Cerreto, & MacDonald, 1977)、ストレス反応を表出しやすいと考えられる。

最後に、本研究の課題を述べる。本研究では、小、中、高校生を対象にして調査を行ったが、年齢幅を考慮して、小学 6 年生、中学 2 年生、高校 1 年生の三つの異なる年齢層のサンプルのみを用いた。交換志向性の調整効果における発達的変化をより明確な形で示すためには、例えば、小学 1 年生から高校 3 年生までというように対象とする学年の範囲をさらに広げることが必要である。さらには、児童期から青年期初期だけでなく、成人期や老年期を含めた生涯発達心理学の観点から研究を行う必要がある。

引用文献

- Adams, J. S. (1965). Inequity in social exchange. *Advances in Experimental Social Psychology*, 2, 267-299.
- Austin, W., & Walster, E. (1974). Participants' reactions to "Equity with the world." *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 528-548.
- Austin, W., & Walster, E. (1975). Equity with the world: The trans-relational effects of equity and inequity. *Sociometry*, 38, 474-496.
- Barrera, M., Jr. (1986). Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- Buunk, B. P., Doosje, B. J., Jans, L. G. J. M., & Hopstaken, L. E. M. (1993). Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 801-811.
- Buunk, B. P., & Prins, K. S. (1998). Loneliness, exchange orientation, and reciprocity in friendships. *Personal Relationships*, 5, 1-14.
- Buunk, B. P., & Van Yperen, N. W. (1991). Referential comparisons, relational comparisons and exchange orientation: Their relation to marital satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 710-718.
- 福岡欣治・橋本 幸 (1992). 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャルサポートの測定 健康心理学研究, 5, 32-39.
- (Fukuoka, Y., & Hashimoto, T. (1992). Measurement of perceived availability of social support based on specific relationships. *Japanese Journal of Health Psychology*, 5, 32-39.)
- Gleason, M. E. J., Iida, M., Bolger, N., & Shrout, P. E.

- (2003). Daily supportive equity in close relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1036-1045.
- 國枝幹子・古橋啓介 (2006). 児童期における友人関係の発達 福岡県立大学人間社会学部紀要, **15**, 105-118.
- (Kunieda, M., & Furuhashi, K. (2006). The development of friend-relationships in childhood. *Journal of the Faculty of Integrated Human Studies and Social Sciences, Fukuoka Prefectural University*, **15**, 105-118.)
- Milardo, R. M., & Murstein, B. I. (1979). The implications of exchange-orientation on the dyadic functioning of heterosexual cohabitators. In M. Cook & G. Wilson (Eds.), *Love and attraction: An international conference*. Oxford: Pergamon Press. pp. 279-285.
- 三浦正江・福田美奈子・坂野雄二 (1995). 中学生の学校ストレスとストレス反応の継時的変化 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 106-107.
- (Miura, M., Fukuda, M., & Sakano, Y.)
- Murstein, B. I., Cerreto, M., & MacDonald, M. G. (1977). A Theory and investigation of the effect of exchange-orientation on marriage and friendships. *Journal of Marriage and the Family*, **39**, 543-548.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友だちとのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- (Ochiai, Y., & Satoh, Y. (1996). The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302-312.
- (Okayasu, T., Shimada, H., & Sakano, Y. (1993). Alleviation effects of social support on school stress in junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 302-312.)
- Rook, K. S. (1987). Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 145-154.
- Sprecher, S. (1992). How men and women expect to feel and behave in response to inequity in close relationships. *Social Psychology Quarterly*, **55**, 57-69.
- Sprecher, S. (1998). The effect of exchange orientation on close relationships. *Social Psychology Quarterly*, **61**, 220-231.
- 菅原健介 (1985). 青少年の友人関係の発達の变化と構造 東京都生活文化局 (編) 大都市青年の人間関係に関する調査——対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析—— 東京都生活文化局 pp. 115-118.
- (Sugawara, K.)
- 谷口弘一・田中宏二 (2005). サポートの互惠性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響——利得不足志向性及び利得過剰志向性の発達の变化—— 対人社会心理学研究, **5**, 7-13.
- (Taniguchi, H., & Tanaka, K. (2005). The influence of intraindividual development on the relationship between support reciprocity and mental health: Developmental changes of underbenefitting and overbenefitting exchange orientation. *Japanese Journal of Interpersonal and Social Psychology*, **5**, 7-13.)
- Taniguchi, H., & Ura, M. (2002). Support reciprocity and depression among elementary school and high school students. *Japanese Psychological Research*, **44**, 247-253.
- Van Yperen, N. W., & Buunk, B. P. (1991). Equity theory and exchange and communal orientation from a cross-national perspective. *Journal of Social Psychology*, **131**, 5-20.
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. (1978). *Equity: Theory and research*. Boston: Allyn & Bacon.

——2004. 8. 30 受稿, 2007. 9. 1 受理——